

く、やせ型で、細面の上品な学者らしい顔をしていた。医師のほかに、法律、文法学、論理学、哲学についても書いたり、教えたり有名な法律学者でもあった。アビセンナと同じくらしい優れた医師であった。エジプトの若い医師にガレノスやアビセンナの著作をてほどきし、暗記するほどに熟達していた。しかし、権威に無批判に従っていた訳ではなかった。「ガレノスの表現をあまり高く評価せず、その弱さや背後に何も無いその回りくどさを批判した。種々の動物の身体構造には違いがある。比較解剖が必要であり、その違いに注目しなければならぬ。」と書いて多くの著書を書いた。

彼の著書の『アビセンナのカノンの解剖学への注釈』のなかにカイロのアト・タタウィは肺循環の論述を確認し、博士論文に提出したのであった。『アビセンナのカノンの解剖学への注釈』はラテン語に翻訳されていないが、アラビアの書誌学者の間では有名であった。そのコピーがベルリン、パリ、ポトリアン、エスクリアルルの四か所があり、更にダマスカス、ベルシャの二か所にもあってこれらを検討して、ハダツドらは次のように要約している。

一、ガレンのいうように心室中隔には孔はなく、厚い。
二、血液は肺動脈から肺にいき、滲出して空気と混合し、浄化され肺静脈を通過して心臓の左側に達する。

三、肺動脈は壁が厚く二重構造であり、肺静脈は壁は薄く単構造である。

四、肺は細気管支、肺動脈枝、肺静脈枝が粗い多孔性の物質

でつながっている。

五、肺動脈は肺に栄養を与える他に血液と空気を混合して動物精気を与える。

六、心臓は動物精気をつくりそれを全身におくる。

七、心臓は右心室で栄養されるといふのは間違いで、冠動脈がある。

八、肺静脈は煤で満たされているのではなく、肺から血液で満ちている。

これらのことから、ナフィスの肺循環理論は極めて論理的であり、時代を越えた炯眼には驚嘆のほかはない。原書によつた更なる研究の望まれるところである。

(平成八年四月例会)

オランダ商館長の住友銅吹所見物と饗応・贈答

片桐 一 男

オランダ商館長の江戸参府旅行は、ヨーロッパ人が鎖国日本を定期的に旅する唯一の機会であり、鎖国下の日本人がヨーロッパ人を観察し、接触できる貴重な機会であった。

往路・復路において、一宿一泊の大多数の宿はさておき、往路・復路ともに何日か宿泊した定宿、すなわち、江戸・京・大坂・下関・小倉、五都市の「阿蘭陀宿」は、鎖国時代、長

崎以外における、またとない日蘭交流の舞台であった。

五都市の「阿蘭陀宿」のうち、もつとも重要な定宿は江戸は本石町三丁目にあった長崎屋源右衛門であった。しかし、火事と喧嘩は江戸の華といわれた江戸の定宿長崎屋に関する史料は皆無に近い。これを補うには、京・大坂など拠点となつた定宿に目を向けてみなければならぬ。幸い、京の定宿・海老屋に関しては、少しく関係史料を得て、考察を進めているが、それと密接な関係を有した大坂の定宿について、従来、これを単独に採り上げた論稿には接し得ないでいる。

江戸時代後期と推定される『長崎諸役人帳』（九大、松本文庫）には、阿蘭陀宿として、

大坂 長崎屋辰吉

とみえる。天明八年（一七八八）の書留『江府参上阿蘭陀人付添日記 上』（長崎県立図書館、渡辺文庫）には、

大坂本陣 為川辰吉

とみえる。文化十一年（二八一四）に年番通詞が書き留めた『万記帳』（早大図書館）には、

大坂銅座 為川辰吉

大坂銅座 為川辰吉方

などみえる。

これらをもつて、総合判断するに、為川辰吉は大坂銅座の責任者であると同時に大坂の本陣として参府のオランダ人一行の定宿に指定されていた大坂の阿蘭陀宿長崎屋辰吉であったことが判明する。

江戸参府の帰路、歴代のオランダ商館長が大坂の住友泉屋銅吹所を訪問し、輸出向けの棹銅製作の作業を見物することが慣例化していた。

一七〇〇年五月十三日、参府の帰路、商館長P・ド・フォスが随員たちと銅吹き作業を見物、翌十四日夕刻、第四代泉屋吉左衛門が手代の五右衛門を伴つて商館長を訪ね、商館長の訪問を受けた名譽に感謝した。その際蜜漬けと砂糖菓子とともに、いろいろな蒸留酒でもてなされた主従がすっかり酔っ払ってしまった、臨場感溢れる面白い記事を、庄司三男氏が『住友史料叢書・月報6』で紹介されている。それが泉屋関係者の名が『商館日記』に出て来る最初であるとも記されている。

オランダ人の吹所入来の際には、手土産の舶載品が持参され、帰りには泉屋からも土産の品が贈られた。土産・餞別の品々の贈答については、それが即、鎖国下における物的交流の意味をもつたから、数の多少にかかわらず、注目に値する。

『商館日記』『徳川実紀』共に記事を欠く天保五年（一八三四）商館長シットルスと書記フロノフィウスが吹所訪問見物をした際の様子を『紅毛人入来之控』（住友史料館蔵）からみても、四月十三日に一行は、「銅座」為川方に着き、十五日に「吹所見物入来」となった。十五日は雨天であったが、「五ツ半時（九時）に「銅座出宅」、「東御番所（東町奉行所）より「西御番所」の「定礼」をすませて、泉屋へ到着したのが「九ツ時（十二時）」直ちに「吹所見物」、「友賢公（第十代吉次郎友規）」

が「案内」した。

吹所の見物が済んで、直ちに座舗で饗応となった。泉屋の「饗応取持いたし候」任方が上手だったせいか、「就れとも醗酏」となり、「蘭人殊之外喜悦之趣」で、「八ツ(午後二時過)」に立、「銅座へ帰宅」の模様であった。蘭人「土産」の品々は、

仏手甘酒

茴香酒 フラスコ入り

肉豆蔻 一壺

煙管 貳本

但白焼蘭製 赤焼とも壺本ツ、

舶載の酒と漬物、それに細長い陶製の煙管二本。このときものかどうか、特定はされていないが、現在も住友家には、司馬江漢の絵や版画にも見えているハウダ・パイプが伝世品として珍藏されている。

そこで、泉屋からも「挨拶」として「兩人」へ、

松寿 酒 貳樽 五升ツ、入

求肥糖 二箱

の二品が贈られた。二品のうち「松寿」という名の酒については、

当方江罷越候節、右酒差出候処、其味ハひ氣ニ入、数盃呑候ニ付、其時宜ニよつて、見斗、差出くり候事

と、特に注記しているところを見ると、シトルスたちが「醗酏」にいたった「美酒」が「松寿」という銘柄の酒であった

ことを知り得る。

一行帰宅のあと、「引続」いて、「友賢公」に「弥兵衛」が供をして、「饒別」の品々を宿所長崎屋為川辰吉方へ届けたところ、「又、白赤葡萄酒フラスコ入式ツ」を「譲請」けることとなった。

先の『商館日記』の伝える泉屋主従の酔容記事と、住友史料の伝える蘭人醗酏記事と、好一對をなしているではないか。このような土産と挨拶や饒別の品々の贈答を通じて、舶載品の鎖国日本への流入、日本製品の流出を具体的に知ることとなる。

阿蘭陀宿におけるオランダ医師による診療活動の記録は省略されがちである。今後の発掘が期待される。

なお、大坂オランダ宿のことについては、「大坂の阿蘭陀宿長崎屋とカピタンの吹所見物」(『日蘭学会会誌』第二〇巻第二号、一九九六年三月)を参看願いたい。

(平成八年四月例会)

着想としての内視鏡

多賀須 幸 男

内視鏡を最初に思い着いたのは一八〇七年のボッチニーということになっている。しかしそれよりも十三年前の寛政六年(一七九四)に江戸で出版された「竹斎老宝山吹色」と題する